

## 『医学原始』の語彙について——日本の洋学への影響を中心に

舒 志田

### 1 はじめに

十六世紀以降、中国へ布教に来た西洋宣教師たちはその伝教活動を展開するために、多くの教義書を著した。また、伝教に際して、かれらは西洋の数学、天文学、地理学、医学などの科学知識をも紹介し、多くの著作物を残している。

こういった宣教師らの著述が近世ないし近代中国の学術思潮に大きな影響をもたらし、更に、その中の特に天文学、地理学などといった実用書の多くは日本にも将来され、近世・近代日本の学術や文化の発展にも寄与したことは、一般的に認められた事実である。

本稿では中国初期洋学書が語彙面に於いて、<sup>1</sup> 一体、日本語にどれほど影響を及ぼしたのか、日本側の洋学資料に即して検証して見たい。

これまで同趣旨の研究がけっして多く見られたとは言えないが、たとえば、遊子六の『天経或問』（1675年序）が江戸時代の日本の天文学などに多大な影響を与えたことは夙に、吉田忠氏、渡辺敏夫氏らによって論証されている。<sup>2</sup> また、方以智の『物理小識』（1664年刊）が杉田玄白の『解体新書』（1774年）に影響を与えことは、近代日中学術用語交渉史の視点から杉本つとむ氏によって考察されている。<sup>3</sup>

これらに比べて、王宏翰の『医学原始』（1692年刊）が日本の洋学に与えた影響については、あまり論じられることなく、僅か一、二の論文の中で少し触れられている程度である。

これら天文・暦算関係分野に比べると、医学の領域における影響はほとんどない。それは、イエズス会士著訳書においては、鄧玉函 (Joannes Terrenz, 1575-1630) の『人身説概』や満州語の解剖書などわずかな例を除いては医学書は著されなかったようであり、それらの書も舶載された形跡がないからであった。むしろそこから学び知った中国人の著作、たとえば後述の方以智 (1611-1671) の『物理小識』におけるガレノス医学知識の影響や、あ

---

<sup>1</sup> 本稿では、佐藤亨『近世語彙の研究』（桜嵐社1983年）の用語を踏襲し、幕末から明治にかけて日本に移入された中国側洋学資料を便宜上、中国後期洋学書と称し、それ以前の洋学書を中国初期洋学書と呼ぶことにする。

<sup>2</sup> 吉田忠『天経或問』の受容（『科学史研究Ⅱ』1985年）、渡辺敏夫『近世日本天文学史（上）』（恒星社厚生閣1986年）の第三章『天経或問』とその影響』を参照されたい。

<sup>3</sup> 杉本つとむ『杉本つとむ著作選集2 近代日本語の成立と発展』、八坂書房1998、357-382頁を参照。

るいはその独特の光の理論の『解体新書』の視覚（眼球の機能と光の屈折）と光線の説明の部分の引用（ただし玄白らは誤解している）、さらに王宏瀚（1700 頃没）『医学原始』（1688）中の精神の座としての脳の機能に関する記述の玄沢の『重訂解体新書』への影響などが注目される。<sup>4</sup>

『洋学書事典』には、『天経或問』と『物理小識』について、それぞれ解説項を設けているが、『医学原始』に関しては一言も記述がない。

そもそも、『医学原始』は中国においても伝本が少なく、長い間注目されていなかったようである。1989年に上海科学技術出版社が『明清中医珍善孤本精撰 三』として、中華医学会上海分会図書館蔵康熙三十一年（1692年）の原刊本（四巻、以下「四巻原刊本」と呼ぶ）を影印出版して以来、ようやく人の目を惹くようになった。<sup>5</sup>

日本では、2000年の第101回日本医史学会総会において、陶恵寧氏による「『重訂解体新書』所引の『医学原始』について」という報告がなされた。大槻玄沢の引用書籍の選択方針、見方が如何なるものであったかを、①『医学原始』の重視；②西洋医学の引用；③漢方医学への批判、という三点にまとめた報告だけで、<sup>6</sup> 日本における『医学原始』の受容の実態はまだそれほど究明されていない。また、専門分野の関係で、語彙面における日本への影響については、陶恵寧（2000）では言及されていない。

しかし、大槻玄沢（1757-1827）の『重訂解体新書』（1798年訳稿なる、1826年刊）の中で、語彙の面からみても、中国初期洋学書の影響を受けていたことは事実である。例えば、「乳糜」がその一例である。

乳糜 按明人訳曰乳糜、即是也。今襲用之。（熊氏泰西水法曰、胃化飲食乃成白色、如乳粥之凝。又云、飲食胃化蒸発変伝、遂化血滯脈者成乳糜之類、即是也）（重訂解体新書・名義解）

重訂版に限らず、玄白の『解体新書』から既に『物理小識』や『医学原始』などの中国初期洋学書の恩恵を蒙っていたのである。和製漢語と言われた「神経」も、実は「神液経絡」「元神経脈」という漢人の語に示唆され、改訳して「神経」と訳したわけで、玄白らの創訳ではない。<sup>7</sup>

以下、『医学原始』が日本の洋学に及ぼした影響を、『解体新書』及び『重訂解体新書』を中心

<sup>4</sup> 吉田忠「蘭学と近代科学」『日中文化交流史叢書 8 科学技術』大修館書店 1998年、238-239頁。

<sup>5</sup> 2014年に、中医薬古籍珍本点校叢書の中の一つとして、中華医学会上海分会図書館蔵康熙三十一年（1692）刻本を底本とした点校本『医学原始』（日本内閣文庫所蔵『医学原始』九巻写本を参考にして校正）が出版された。

<sup>6</sup> 陶恵寧「『重訂解体新書』所引の『医学原始』について」『日本医史学会雑誌』通巻第1449号、第46巻第3号、2000年342頁。

<sup>7</sup> 杉本つとむ（1998）、361頁。

に、語彙の面から考察していく。<sup>8</sup>

## 2 『医学原始』とその背景

『医学原始』の作者である王宏瀚（1648-1700年）は字恵源、号浩然子、清の医者で、江蘇華亭（現在の上海市松江区）の人である。後に呉西城（今の蘇州）に移住する。儒学や天文学などに熟し、また、当時の西洋宣教師たちがもたらした新しい知識をも積極的に摂取しようとしていた。

今余得遇西儒、参天講性、溯源而至舜孔孟、其理惟一（医学原始・卷一、3頁）

范適は王宏瀚を「中国第一接受西説之医家」（西洋の説を受け入れた中国医家の第一人者）であると評している。<sup>9</sup> その『医学原始』は近代早期における中洋折衷の医学代表作の一つであると言っても過言ではない。

本書は前述した四巻原刊本の外、日本内閣文庫所蔵の九巻写本がある。九巻写本の第一～第四巻の内容は四巻原刊本のそれとほぼ同じである。

『医学原始』はイタリア人宣教師のアレーニ（Giulio Aleni, 1852-1649, 艾儒略）著『性学摘述』（1623年）や、ワゴニー（Vagnoni, 1566-1640, 高一志）の『空際格致』（1633年）、アダム・シャール（Johann Adam Schall von Bell, 1592-1666, 湯若望）の『主制群徴』（1629年）などから西洋の知識を取り入れている。

愚少自苦、稟拙学疎、凡三教諸子等書、雖經弁論詳考、遇老儒博学之士、俱師礼問論、励志苦心、潜学有年、而本来性命之原、俱無究竟。後得艾儒略高一志性学等書、極論格物窮理之本、理実明顕、至立論天円地円之一端、真発千古未明之旨。（医学原始・卷二）

湯道末主制書曰、首骨自額連於腦、其数八。上領之骨十有二、下則渾骨一焉。（医学原始・卷一・元神元質説）

とりわけ、巻一の「元神元質説」の篇及び巻二全篇において、ほぼアレーニの『性学摘述』における叙述内容をそのまま採用している。<sup>10</sup>

<sup>8</sup> この両書の訳語自体の研究として、佐藤亨「解体新書より重訂解体新書へ——訳語の変遷」、「重訂解体新書の訳語」（『近世語彙の歴史的研究』桜楓社1980年）がある。

<sup>9</sup> 范適『明季西洋伝入之医学』（中華医史学会刊1942年）巻一、方豪『中国天主教史人物伝・下』（1973年）の「王宏瀚」伝を参照。

<sup>10</sup> 『性学摘述』は明治以前に直接、日本に輸入されたことはない。本書の日本における流布本は1873年の上海慈母堂重刊本である。海老沢有道『南蛮学統の研究』（創文社1958年）によると、青山学院大、聖心女子大、東洋文庫などに所蔵。本稿で利用したのは九大蔵同重刊本である。

付表 1：性学所述と医学原始の内容対照

| 性学所述 |              | 医学原始 |               |
|------|--------------|------|---------------|
| 卷之一  | 生覚靈三魂総論      | 卷一   | 天人合一論一、元神元質説三 |
|      | 魂性諸称異同       | 卷一   | 要約            |
|      | 靈性必有         |      |               |
|      | 靈性非気         |      |               |
|      | 人惟一魂         |      |               |
|      | 人物不共一性       |      |               |
|      | 人性非造物主之分体    |      |               |
|      | 靈性非由天地非由父母所賦 |      |               |
|      | 靈性非由外来非由内出   |      |               |
|      | 靈性為造物主化生賦界   |      |               |
| 卷之二  | 靈魂為神与形軀判然為二  |      |               |
|      | 靈性身後永在不滅     |      |               |
|      | 靈魂不滅善惡同然     |      |               |
|      | 靈魂離身自有明覚     |      |               |
|      | 靈魂身後不輪廻人世    |      |               |
| 卷之三  | 約論成長         | 卷二   | 生長頼補養論        |
|      | 論四液          | 卷二   | 四液総論五         |
| 卷之四  | 総論知覚外官       | 卷二   | 知覚外官総論十一      |
|      | 目之官          | 卷二   | 目之視官十二        |
|      | 耳之官          | 卷二   | 耳之聴官十三        |
|      | 鼻之官          | 卷二   | 鼻之嗅官十四        |
|      | 口之官          | 卷二   | 口之味官十五        |
|      | 触之官          | 卷二   | 身之触官十六        |
| 卷之五  | 総論 知覚内職      | 卷二   | 知覚内司総論十七      |
|      | 論総知之職        | 卷二   | 総知司十八         |
|      | 論受相之職        | 卷二   | 受相司十九         |
|      | 論分別之職        | 卷二   | 分別司二十         |
|      | 論涉記之職        | 卷二   | 涉記司二十一        |
| 卷之六  | 辯覚性靈性        |      |               |

|     |         |    |               |
|-----|---------|----|---------------|
|     | 論嗜欲与愛欲  |    |               |
|     | 論運動     |    |               |
| 卷之七 | 記心法     | 卷二 | 記心法二十二        |
|     | 記心辨     | 卷二 | 記心辨二十三        |
|     | 論寤寐     | 卷二 | 寤寐論二十四        |
|     | 論夢      | 卷二 | 夢論二十五         |
|     | 破夢      | 卷二 | 同上            |
| 卷之八 | 論嘘吸     | 卷二 | 嘘吸論二十六        |
|     | 論寿夭     |    |               |
|     | 論老稚     | 卷四 | 腎臟図説考における齒の記述 |
|     | 論生死附諸情論 |    |               |

『性学摘述』の卷之一、二は靈魂論で宗教的な内容となるが、『医学原始』では、それを医学的な立場から利用できる部分だけを汲み取り、宗教的な色合いを最小限に抑えようとしていた。例えば、いわゆる「魂」について、アレーニは次のように述べている。

若夫活模。西土謂之亜尼瑪。此或称之為魂。即属活物之性也。物有活模者。総帰三種。一乃草木花果。各有生死榮枯。四行金石之所絶無者。一乃禽獸虫魚。成長之外。復有觸覚運動之能。又草木所絶無者。一乃吾人。既有成長知覚。復有明理推論之能。為禽獸所絶無者。故魂之所属。分三種焉。一曰生魂。一曰覚魂。一曰靈魂也。（性学摘述・卷之一・生覚靈三魂総論）

これに対して、『医学原始』では下記のように書き直しており比較的に医学的に説明しようとする印象を受ける。

然草木有生性、頼生氣之發育。禽獸有覚性、從肉軀而發、頼血氣之精華。氣聚則生、氣散則滅。故禽獸死後無靈也。惟人之性、上帝賦畀、純為神靈、絶不属氣。魂合則生、魂離則身死也。夫人之疾病、皆系元質稟氣与後天培養精血失調、或飲食勞逸過度、或時令与地土不和而生者。…（医学原始・卷一・元神元質説）

しかし、『性学摘述』の卷之三以下における医学的部分はほぼ、原文通りに引用されている。なお、西洋医学受容の観点から、『医学原始』の内容について更なる研究が期待されるが、そこは医学専門家に委ねたい。ここでは、『医学原始』の日本での受容及びその語彙面における影響を若干、考察していきたい。

### 3 日本における『医学原始』の受容

大庭脩氏の『唐船持度書の研究』によると、『医学原始』は正徳元年（1711）に日本に舶載されてきたという。<sup>11</sup> 即ち、向井富が編纂した『商舶載来書目』の「正徳元年辛卯年」の条に、「医学原始 一部六本」という記述が見える。同書目からの抜粋かと思われる九州大学図書館医学分館所蔵の写本『商舶載来医家書目』（同じく向井富の編纂）にも同様の記述が見える。

ということは、『医学原始』が刊行（1692年）されてから僅か二十年ほどで、既に日本に将来されたことになる。但し、その後、本書が日本においてどれほど読まれたのか、これを語る資料は少ない。

国立公文書館内閣文庫所蔵の九巻写本（以下「写本」と略す）は八冊装丁の九巻本である。横17.5cm×縦27.2cm、紙縫り綴じ。書写年代も不明で、内閣文庫の目録には「江戸写本」とあるのみである。「多紀氏蔵書印」がある。多紀氏は代々、幕府の侍医を勤めた家柄で、医籍などの管理をも司ったという。<sup>12</sup> なお、多紀元胤（1789-1827）著『医籍考』の巻六十四に「王氏宏翰医学原始九巻 存」とある。<sup>13</sup> 各冊の具体的な内容は紙幅のため、ここでは略するが、第五冊までの本文内容は前述した四巻原刊本とほとんど同じであり、唯一、繆彤（1627-1697年）による序文が四巻原刊本にはない。第六冊以降の内容（巻五～巻九）は四巻原刊本にないものである。この写本には何人かの手による書入れや朱筆の校正がある。巻二には特に多い。

(A) 紙箋に記入したもの：

- A-1 「宗動天當作十一重 元本新本共作十二 恐訛」（巻二・六四）
- A-2 「天体亘古 亘作宜 訛」（巻二・七三）
- A-3 「上恐土訛（朱筆）」（巻二・七七）
- A-4 「如幾何一規 按幾何疑有誤、元新同」（巻二・一五四）

(B) 頭注式の書き入れ

- 「著 疑若之訛（朱筆）」（巻二・一六九）

(C) 上書き又は傍書の朱筆校正（詳細略）

その校正後の部分（第一～第四巻）を四巻原刊本のそれと照合した結果、すべて一致しているので、校正者は日本に将来された原刊本（恐らく九巻本である可能性が高い）と写本を持ち合わせていたと推定できる。また、書き入れには「新本」「元本」とあることから、本書は何度も書写されたことが窺える。

同時期の『物理小識』及び『天経或問』と比べて、『医学原始』は日本での伝本がすくないが、一部の日本人医学者の間でそれなりに読まれていたのだろうと思われる。以下、本書が日本の

<sup>11</sup> 大庭脩（1967）『唐船持度書の研究』（関西大学東西学術研究所刊）257-258、660、703頁を参照。

<sup>12</sup> 森潤三郎（1933）『多紀氏の事績』、日本医史学会発行。

<sup>13</sup> 国立国会図書館デジタルコレクションの公開資料『医籍考』（国風出版社、1935年）を参照。

洋学にどれほど影響を与えたのか、大槻玄沢の『重訂解体新書』を中心に見ていきたい。

師命を受けて『解体新書』の改定を行った大槻玄沢は、重訂版の最初の附言及び最後の附録の中で次のように述べている。

又如方密之物理小識、王惠源医学原始、略拋西說而論說者。苟有一節之長、羽翼本說者、抄以收諸名義解中、冠曰方氏王氏者是也。又有採散見明季以降群書中者、以為引証者、特曰西洋訳說、不必舉書名及姓名者、省其煩也。（附言）

漢人先我及西洋之事者、如西方要記是也。＜中略＞又劉氏曰、鄧玉函善其国医。＜中略＞医学亦謂有用之者、意当有其成訳之書也。奈余之固陋僅得方密之物理小識、王惠源医学原始等耳。是二百年前先我所発而得其實者也、不為不多矣。然本所取於重訳、而非就彼書訳之者、則未免隔一層而觀焉。（附録・下）

大槻玄沢は、「意当有其成訳之書也」と、中国に医学関係の訳書が既にあったはずだと推測していながら、それを自分は目にすることがなかったという由を述べた後、方密之の『物理小識』、王惠源の『医学原始』などを参考にしたことを明記している。

さて、『重訂解体新書』における『医学原始』の引用については、前記した陶惠寧（2000）の報告があるが、筆者も以前から独自に調査を進めている。<sup>14</sup> 大槻の引用部分が『医学原始』のどの箇所該当するかを調べてみると、それはすべて同書の巻二に集中していることがわかる。いくつか例を挙げておく。

按清王氏知覚外官総論所載、与今所訳說全符。蓋其旧或伝西說而録者也。抄於左以供引証。

（重訂解体新書・巻二・耳篇第十／「回郭」本文の注解）

按漢土輓近方王二氏、所謂腦者、元神之舎、散其氣者、為在筋、乃名之曰筋絡者、蓋指此物也。（同上・巻五・名義解／「神經」本文の注解）

蓋神經四十対、雖均帶知覚運動之細徳、然其用之所専主、則有二分（西哲立其説、別無其特名、余私目之）。其一曰運旋神經。＜中略＞其一曰動覚神經。此則於一身表部眼・耳・鼻・口及筋皮等、使之随意自在、為視聴嗅味、触知動覚、屈伸運転之官能也。（按王氏訳說、分之為二帶曰、知覚之細徳、能動之細徳、蓋近之）。（同上・巻七・名義解／「腦包含内識元神之器」）

輓近王氏伝聞西說、訳載其著書、又因循古経、分経絡二字、以動血脈訳脈経、以静血脈訳血絡。然如出於心者曰脈経、再受其血於支末者曰血絡。則実測之正説、而誠和漢千古未発之新

<sup>14</sup> 陶惠寧はその後、前記の大会報告を元に、「『重訂解体新書』所引の中国書籍の研究—『医学原始』と『物理小識』について」（『日本医史学雑誌』第48巻第2号、通巻1506号、2004年6月、155-174頁）という論文を出している。なお、中国では牛亜華『『医学原始』与日本解剖学訳著『重訂解体新書』（『中華医史雑誌』2009年第5期）などの研究がある。

論也。(同上・卷九・名義解/「主用」本文)

『医学原始』の卷二は最も多くの西洋の医学知識を取り入れた部分で、それまでの漢方医学に決して説かれたことのない知識である。これらの知見に対して、大槻玄沢は高く評価する一方、自分がそれを知り得た喜びをも次のように語っている。

且如方王二氏伝説、雖有偏聽所未尽、先於我殆二百年、本所取於実詣訳説而録也。然未聞世人読之能有注意而感発其諸説者、無可徴千古之医説者也。方今余輩従事於西学、而後閱之、感嘆彼已発千古未明之旨、真開前人未論及者、自喜不寐、故嘗所採録諸説、於本篇重訂之舉、尽廢置之可惜焉、故不厭冗長、摘其用、附録為別卷。(重訂解体新書・附録上)

既に吉田忠(1998)に指摘されたように、<sup>15</sup>『重訂解体新書』までは、一般に神経に関する認識が漢方医学にないと目され、杉田玄白も「漢人所未説者」としていたが、大槻玄沢は改定に当たって、この考えを改め、「且如方王二氏伝説、雖有偏聽所未尽、先於我殆二百年、本所取於実詣訳説而録也」と認めたのである。

ところで、『重訂解体新書』ないしその前の『解体新書』は語彙面で具体的にどれほど『医学原始』の影響を受けたのか、次節において若干対照研究をしてみよう。

## 4 『医学原始』の語彙

### 4.1 語彙の抽出

本来、全書の語彙索引を作成するのが望ましいが、これは別の機会に譲りたい。ここでは、『医学原始』の語彙を、巻一と巻二を重点に適宜抽出した。以下その中の二字語を中心に示しておく。

哀痛 愛欲 安置 按排 按摩 胃化 医学 意義 胃膜 異名 依頼 印象 飲食  
陰陽 宇宙 運行 運動 榮氣 衛氣 銳骨 液道 横隔膜 横骨 黄金 臆指 音声  
会厭 外覺 外官 火域 解釈 外腎 外輔骨 解説 外像 開発 外来 嗅官 覺界  
覺氣 覺具 覺原 核骨 顎骨 学者 覺性 格致 確定 格物 隔膜 学問 覺由  
覺力 踝骨 果実 仮借 仮説 過度 肝化 緩急 眼鏡 完骨 観察 感受 寒暑  
關節 肝臟 氣域 幾何 気管 記含 起居 器具 岐骨 記心 鬼神 記性 犠牲  
季肋 喜怒 肌肉 気味 九覚 九識 宮城 吸徳 吸門 休養 窮理 凝結 胸骨  
兄弟 虚弱 挙動 義理 気力 議論 筋 筋管 筋骨 近似 禽獸 金石 筋脈  
筋力 空虚 空想 空中 孔雀 愚人 屈伸 區別 経緯 形骸 形質 軽重 形象  
形体 経脈 経絡 激動 夏至 血液 血気 血経 血行 月食 結成 血肉 血脈  
血絡 元火 元氣 元行 言語 乾坤 現在 原始 元質 見象 元情 元神 顯著  
見聞 原力 紅液 黄液 口化 口界 公覚 講究 高原 公司 交渉 洪水 後天

<sup>15</sup> 吉田忠(1998)「蘭学と近代科学」『日中文化交流史叢書8 科学技術』大修館書店。



黄道 荒唐 肛門 膏油 五官 呼吸 黑液 黑人 五穀 五識 五臟 骨髓 骨節  
 骨度 跟骨 魂魄 根本 細管 細筋 細筋管 才能 雜物 差別 左右 作用 志意  
 思惟 視覚 自覚 視官 四季 字義 子宮 耳鼓 自己 嗜好 嗜欲 時刻 四肢  
 四時 四司 指示 自信 地震 自然 思想 肢体 舌本骨 膝蓋骨 失調 室内  
 疾病 事物 脂膜 自明 耳目 斜膈膜 借用 邪魔 自由 充實 修身 収入  
 首骨 取捨 受想 受相 受胎 出入 純情 純体 純動 城郭 上顎 涉記 上古  
 昇降 掌骨 乘骨 小指 上主 小腸 上帝 少年 丈夫 小便 消亡 消滅 消耗  
 触官 食管 女子 書籍 觸覚 除德 事理 思慮 耳輪 津液 真牙 真氣 真元  
 診察 斟酌 人心 人身 神性 心臟 腎臟 身体 人体 人物 心包 心胞 神妙  
 人類 髓液 水銀 垂訓 水晶 水底 水道 推論 頭腦 生育 精液 性学 生活  
 生氣 精血 聖賢 西儒 精神 生性 生成 西聖 性体 正大 清濁 生物 性命  
 生命 性理 脊骨 脊髓 背骨 節氣 舌体 舌本 善惡 前陰 先覚 全然 前哲  
 先天 旋轉 造化 総知 壯年 糟粕 臟腑 草木 遡源 咀嚼 大海 大覚 大学  
 大気 胎教 体魄 体質 泰西 大腸 胎動 大便 太陽 墮胎 胆汁 端正 段落  
 知覚 地球 地形 知識 地心 遲速 緻密 中間 中心 昼短線 注入 中年 昼夜  
 超越 長寿 調和 直腸 直行 枕骨 追跡 通達 通報 腠理 帝王 定理 天寿  
 天体 天地 天命 天文 天文家 天文書 道学 刀骨 動作 東西 冬至 道德  
 頭皮 動脈 同名 同類 徳力 度数 突出 内液 内覚 内景 内腎 内輔骨 内臟  
 難解 南極 肉身 日月 乳汁 乳頭 妊娠 熱際 脳骨 脳髓 納像 能力 肺管  
 配合 泄徳 肺臟 胚胎 肺病 肺葉 培養 白液 白人 薄膜 發育 發明 万世  
 判定 万物 尾骨 脾臟 皮肉 皮膚 病氣 表裏 部位 風雨 夫婦 不易 物像  
 不倫 聞官 分属 分布 分別 文理 平均 平行 変化 変徳 弁論 萌芽 膀胱  
 保守 北極 補養 本位 本源 本質 本所 本情 本性 本体 本動 本用 本来  
 魔界 魔境 耳垢 脈絡 名字 未来 無形 明悟 明德 迷惑 毛髮 目撃 文字  
 元行 有形 幽門 幼年 容貌 陸地 立言 立論 流行 流星 隆盛 流通 類推  
 靈覚 靈魂 冷際 靈性 老人 老年 肋骨

#### 4.2 西洋宣教師らの訳語の踏襲

本書は西洋医学の知識を多く取り入れているため、それら新しい概念を表わすのに少なからぬ新語を用いたのである。その多くは当時の西洋宣教師の漢訳書の訳語を踏襲している。

その一：「四元行論」「四液論」に関するもの。

「四元行論」即ち世界を構成する四元素説(気・火・水・土)は西洋の古代以来の基本物質観であり、「四液論」はギリシャ・ローマ医学の基礎となる体液病理説である。西洋近代医学誕生まで、四体液説、四元素説をベースとするユナニ医学が主流となり、十六世紀以降、来華した宣教師らによって中国に紹介された。利瑪竇の『乾坤体義』(1605年)の中で論ぜられて、艾儒略や高一志らの漢訳書にもしばしば紹介されている。王宏翰は『医学原始』において、この説を導

入して、人体の生理構造や病理などの説明に応用したが、用語、概念ともに宣教師らの著書に準拠している。

元行、元動、元情、純体、純動、純情、本情、本所

四液：紅液、黄液、黒液、白液

その二：「十二重天説」「三際説」に関するもの。

アリストテレス以来の「十二重天（または九重天）説」と「三際説」は当時、西洋宣教師たちが中国に紹介した西洋天文学知識の一部分である。古来中国伝統的な「天円地方」という考えに対して、利瑪竇らによって紹介された「地球」という概念が斬新なもので、一部の中国知識人の間でかなり受け入れられたのである。地球は丸くて天の中央に位置し、その外側に、月輪天・水星天・金星天・日輪天・火星天・木星天・土星天・恒星天・宗動天という九重天がある<sup>16</sup>。また地球の周りが三層の気域に包まれており、それぞれ暖かい下域の「温際」、寒冷な中域の「冷際」と酷熱な上域の「熱際」と呼ばれている。

『医学原始』では、「人受天命之性、稟陰陽媾合以成形。肢体百骸、知覚運動、無不与天地相合。故曰人乃一小天地也」<sup>17</sup>という「天人合一論」を唱え、人身の性理を究めるには、まず天地の理を知るべきであると主張し、巻二において、「天形地体図論」という節を設けて、「十二重天説」などを紹介している。用語も宣教師らの著書に準拠している。

天体、地体、地心、地球、気域、熱際、温際、冷際、定理、定数

その三：医学関係の用語

知覚之性、靈明之性；外覚、内覚、発用

五官（五識）：視官、聞官、嗅官、啖官、触官；

五官之用：覚原、覚力、覚界、覚具、覚由

四識：総知、受相、分別、涉記；印象、印像

知覚、視覚、触覚；口化、胃化、肝化

その四：「靈魂論」に関するもの

上帝、上主、生氣、覚気、靈気、生性、覚性、靈性、生魂、覚魂、靈魂

#### 4.3 王宏翰の新造語

上記以外に、王宏翰自身による造語かと思われるものもある。例えば、現在でいう呼吸機能を「吸徳」と言い、消化機能を「変徳」、排泄機能を「除徳」「泄徳」、神経機能を「生活至細之徳」

<sup>16</sup> 説によっては多少違いがあるが、十二重天説では、第八重恒星天までは同じで、その上に第九重東西歳差天、第十重南北歳差天、第十一重宗動天、第十二重永静天とある。

<sup>17</sup> 『医学原始』巻一・天人合一論。

及び「動覚至細之徳」と呼んでいる。また、現在でいう動脈を「脈経／脈絡／筋脈」、静脈を「血絡／血経／血脈」と名づけている。

## 5 『重訂解体新書』などの語彙との関連

『医学原始』から抽出した語彙の中で、『重訂解体新書』などに同じ字面が見えるものを対象に検討する。

### 5.1 在来語

#### 【直腸】

直腸者、又広腸之末節連肛門也。（医宗金鑑・刺灸心法要訣・大腸経）

広腸一曰肛門、＜中略＞一名直腸、一名魄門、亦名肛門、受大腸之谷而導出焉（医学原始・卷五・広腸）

直腸 [応的斯低奴斯列古丟模]羅 [列吉的達丟模]蘭 按、「列吉斯」者、直也。此以其直下肛門也。此物特与漢名符合。又名終腸。（重訂解体新書・名義解）

#### 【関節】

関節不利屈伸。（素問・六元正紀大論）

本蔵篇黄帝曰、人之血氣精神者、所以奉生而周於性命者也。経脈者、所以行血氣而榮陰陽、濡筋骨利關節者也。（医学原始・卷一・総論）

其為附属者有二 一者關節也。疎而可按之。（解体新書・卷之一・骨節分類篇第四）

#### 【横隔膜】

唐の王冰次注、宋の林憶など校注した『黄帝内経素問・気厥論篇』に用例が見える。

心移熱於肺、伝為膈消心肺両間、中有斜隔膜、膈膜下際、内連於横隔膜、故心熱入肺、久久伝化、内為膈熱、消渴多飲也。

心包一名手心主、在心下、横隔膜之上、豎斜隔膜之下、其与横膜相粘、而黄脂漫裹者、心也。

（医学原始・卷四・心包絡）

夫胸者、居体之中也、其為之者、肋骨胸骨椎骨之相擁也、是謂自頭頸下至季肋之横隔膜。

（解体新書・卷之三・胸並隔膜篇第十三）

### 5.2 在来語の意味変化

#### 【動脈】【血脈】

漢方医学における「動脈」とは、字義通りの「動いている脈」の意味である。『医学原始』でも同様な意味合いで使われている。

浩然曰、謂有形者、指其経依附各属経絡而流貫者言也。蓋手少陽内十二経中之一経、其動脈原有起止、亦有脈絡経筋穴、出入相応、以経絡乎上中下一身也。（医学原始・卷三・三焦図説考）

「血脈」も漢方医学では字義通り「血流の脈絡」（現在で言う血管や血液循環のこと）の意味である。『医学原始』においても、この意味で使われた場合が多い。

或問：水多在下而土在上、何也？曰：上主初造天地時、無山無谷、地面為水所蔽、但欲適物之便、故山峙谷降、水乃流而盈科、如人身血脈周流、非土在水上也、詳上論可知也。（医学原始・卷二・四元行論）

如人心痛則覺痛、痒則覺痒、熱則覺熱、寒則覺寒。此何以故、血脈流通使用之然也。（医学原始・卷一・元神元質説）

一方、現在で言う動脈のことを「脈経」「脈絡」、静脈のことを「血絡」と呼んでいる。

夫人身大小諸血絡、散結周身、其根皆生發於肝、其本性之徳亦在肝、帶黃白黒液、同紅液灌漑於血絡、此為一分、養周身之肢体者也。更以一分、從肝帶三液以至心、心細煉為甚熱至純之血、並生活至細之徳、流灌於脈絡、以運周身。而脈絡之根与血、同生發於心者也、脈経分繞周身之肢体、具貼於血絡之下、血絡与脈経各有本絡、各有相別之血也。（医学原始・卷二・脈経之血由心煉論）

但し、ところによっては、「筋脈」（=動脈）と「血脈」（=静脈）と呼ぶ場合もある。

肺中有一筋脈、合而到心之右孔、気海自此心孔通出、以養其肺。而又有一血脈、貫通其肺、合於心之左孔、肺体皆通嘘吸之氣焉。（医学原始・卷二・嘘吸論）

『解体新書』では、現在でいう動脈、静脈のことをそれぞれ、「動脈」（オランダ語の *Slagader*）、「血脈」（同 *Ader*）と訳している。

私刺古亜題爾。＜此翻動脈。漢人所説動脈是也<sup>18</sup>＞

何兒亜題爾。＜此翻血脈。漢人所説青脈是也＞（解体新書・卷一・格致篇）

これは、大槻玄沢の重訂版になると、「動血脈」と「静血脈」に改訂された。なお、『西説医範提綱』（1805年）には現在の「静脈」という語が登場している。

### 5.3 「新漢語」の一致

『医学原始』にある新漢語らしきもので、『重訂解体新書』などにも使用された語として、次のようなものが挙げられる。

<sup>18</sup> 小川鼎三（1983）『医学用語の起こり』（東京書籍）では、動脈という言葉は中国で作られ、日本でも用いられたのだが、漢方医学での動脈は皮膚の上から脈動が触知されるものだけを意味したもので、西洋解剖学の動脈とは内容の広さが大いに違っていると指摘している。同書 pp. 59 を参照。

気管、血液、血行、触覚、脊髓、尾骶骨、耳鼓<sup>19</sup>

これらは、いずれも『重訂解体新書』以前に、「漢籍または漢訳佛典に典拠を見出しえず、更に国語の用例も確かでないもの」とされていたが<sup>20</sup>、『医学原始』や『物理小識』から移入された可能性が高い。

### 【気管】

嘘吸之具有四、一為心、一為肺、一為膈、一為気管也。(医学原始・卷二・嘘吸論)

上為気管。從喉頭起。与食道並。經頭茎。直連肺。(解体新書・卷三・肺篇)

気管 (直訳) <中略>即漢所謂気管也。(重訂解体新書・名義解)

なお、中国初期洋学資料以外の漢籍における「気管」の使用例は筆者はまだ確認できていないが、『泰西人身説概』(1623年頃)にも「気管」の用例が確認できる。

其三喉管之簧肉塊為之。此簧蓋於気管之上、不必全滿、皆任其大小以為声音。飲食過時、此簧又能遮蓋気管而通送於食管、如橋梁然。(泰西人身説概・卷下・言語)

### 【血液】

「血液」は『解体新書』では、まだほとんど「血」となっていたが、一箇所だけ「血液」の字面が見える。

諸脈者。長而蔓延、其質如膜。悉如管。是即血液之所行也。(解体新書・格致篇)

酒井シズ氏の現代語訳『解体新書』では、この箇所をそのまま、「これは血液の流れる道である」とされているが、ここで言う「諸脈」は、その後にくる文を見ると、現在で言う動脈と静脈、それにリンパ管と乳糜管を総括しているのがわかる。つまり、上記例にある「血液」は現在で言う血液、及びリンパ液と乳糜などの総称であり、「血」と「液」と分けて捉えたほうが適当だろうと思われる。

ところで、大槻玄沢の重訂版に至って、玄白が言うところの「血」を「血液」と改訳された。これは佐藤(1980)にも指摘されたところである。例えば、

血脈 膜質円形之長管也。即血液往還之道路。而有二種。一曰動血脈。一曰静血脈。

重訂解体新書・卷一・身体元質篇第三)

その改定の参考になったのは下記の『医学原始』における用例ではないかと思われる。

其視之具即有三者。一目之前後上下、有薄膜層層包護眸子、如城郭然。一腦内総知所有二筋通目而授知覚之氣、与其能視之力也。一人身有四液、而目另有三液凝結成体。三液分為三層、

<sup>19</sup> 「心臓」「肺臓」「肝臓」「腎臓」「脾臓」などの各語については今回詳細の考察に及ばなかった。

<sup>20</sup> 佐藤亨(1980)『近世語彙の歴史的研究』(桜楓社)、pp. 320, 340.

首層即凝晶色之液、晶液甚堅、光如水晶。次層則凝る赤色之液、与血液不同、乃在血之外、為晶液之界。三層則凝藍色之液、聚而堅目之瞳。 (医学原始・卷二・目之視官論)

王宏翰は『医学原始』において、高一志ら宣教師が紹介した「火気水土四元行説」及び「四液説」を取り入れて人体の生理現象を説明している。血液・胆汁・漿液・髓などの人体に含まれた液体成分を紅液・黄液・黒液・白液の四種類に分けている。

夫飲食補養由三化而成。一口化、一胃化、一肝化。＜中略＞胃化飲食、乃成白色、如乳粥之凝。肝有多細脈絡、吸胃化膏脂以入肝、余糟粕乃入大腸、而為大便也。肝以所翕之精華、化為四液、散於百体、即肝之第三化也。四液之中最純者為紅液、血為紅液也。其液之次者、成黃白黒三液。(医学原始・卷二・生長頼補養論)

上記の例に出た「血液」という表現も、或いはこういう考えに基づいて触発的に創出された言葉であるかもしれない。実際、筆者も『医学原始』にこの一例しか見つけ出せず、あとは全て「血」または「紅液」となっている。大槻玄沢もこの「四液説」に注目していたようであり、「紅液」という表現も借用している。

乳糜經其本道而上。与逆行帰心之血相混化。變為紅液。以入於心右室。而由肺動血脈上輸兩肺。(重訂解体新書・卷三・心篇第十五)

そして、「血」を「血液」に改訳するに際しては『医学原始』における「血液」の用例からヒントを得たのではないかと考えられる。

### 【血行】

「血行」という語は現代中国語では、医学用語として確立されていないようである。少なくとも『漢語大詞典』には載録されていない。日本語の「血行」というのは普通、中国語で「血液循環」と訳される。『医学原始』には「血行」また「血流行」という表現が見られる。

黄液以甚熱陪血、使血行不滯。(医学原始・卷二・紅液黄液)

黄液近熱、使血流行不滯。黒液近冷、使血不過於流而緩行。(医学原始・卷二・紅液黄液)

『重訂解体新書』では、次のように使われている。

因脈管中有障膜。以節其血行。便其送迎也。(重訂解体新書・卷三・靜血脈篇第十七)

### 【触覚】

いわゆる五感の一つである触覚であるが、その表現は意外にも早く中国初期洋学書の『性学楠述』に見える。『医学原始』はその部分を引用している為、この「触覚」という用語も登場している。但し、五感の表現は当時、まだ全部出揃っていない。「触覚」と「視覚」の二語のみ見出される。

夜半乍醒、目中發光、能見室中之物、即可讀數行之書、俄頃遂滅、何也？曰：乃繇視覺之氣、自腦至目、原具內光、或人此氣甚旺、睡久更聚、其目乍開、其光迸出。（医学原始・卷二・目之視官論）

身為觸之官、觸覺之用、遍体有之。〈中略〉然觸覺之原、則有一絡、生自腦中、帶動覺至細之德（筆者傍注：神經のこと）、布遍周身、而為觸之能、使知覺諸情。故覺者、賴此無算細筋所通之皮肉、若無皮肉、則亦不能觸覺。〈中略〉大抵人之血氣愈清美者、其觸覺愈精細。〈中略〉独四体觸覺、人得最精、雖四末之处、稍有毫末之刺、風雪之着、無不觸覺冷熱痛痒也。（医学原始・卷二・身之觸官論）

この「觸覺」という用語は大槻玄沢にも採用されたのである。

内識外知藏神之府 參閱西書。彼方古来以頭腦為藏神之府。蓋所出於冥測窮理云。凡人之所為知識者。在於頭腦中。其機分之為外內。其外者五知。一曰聽聞。二曰視瞻。三曰香嗅。四曰口。五曰肢体觸覺。其內者三識。一曰総意。二曰思想。三曰記性。稱之為神機之五知三識。是皆西哲之所定。而今新製訳名者。按明人一訳説曰。人之神有三司。一明悟。二記含。三愛欲。凡学者所取外物外事。皆從明悟而入。藏於記含之内。異日明悟愛之而欲用之。有從記含中取之是。此与今所訳名目頗相似。因附載於此。（重訂解体新書・卷七・卷二名義解）

### 【脊髓】

中国側では、方以智の『物理小識』には「腎髓」という形で現われ、<sup>21</sup>『医学原始』には「脊髓」が見える。

腦散動覺之氣、用在筋。第腦距身遠不及、引筋以達百肢。復得頸節腎髓連腦為一、因遍及焉。〈中略〉又從腎髓出筋三十偶、各有細脈旁分、無膚不及。〈中略〉此論以肝心腦筋立論、是靈素所未發、故存以備引觸。（物理小識・卷三）

肺右下見心系、系於脊髓、下通於腎。（医学原始・卷四）

一方、「脊髓」は『解体新書』の「格致篇」では、単に「脊」と言い表わされているが、大槻玄沢の重訂版の同じ箇所では「脊髓」に改められた。但し、『解体新書』に「脊髓神經」という複合語も見えるので、「脊髓」は大槻の新訳ではない。

脊髓神經。從之起者。左右各三十矣。（解体新書・卷二・腦髓並神經篇）

### 【尾骶骨】

然二腎中間有命門穴者、在下七節、自尾骶骨從下数至上之七節是也。（医学原始・卷三・内景全図）

『重訂解体新書・卷六・卷一名義解下』の「補骨骸全図符号解説 第二図 見全骨後面形状」に

<sup>21</sup> 〔蔡伝〕腎, 脊也。（大漢和）

「キ 尾骶骨」とある。

### 【耳鼓】

両耳各有耳鼓。知音者、乃耳鼓助聴也。(医学原始・卷二・耳之聞官論)

『解体新書』では、「鼓膜」だけ見えるが、大槻は重訂版において、新たに「耳鼓」という用語を加えたのである。

耳鼓 薄膜緊張、為聆隧之底、又名為之曰鼓膜。

## 6 まとめ

本稿は、これまであまり注目されなかった『医学原始』を取り上げて、その語彙と日本語語彙との関連性を、日本側の洋学資料である『重訂解体新書』などに照らし合わせて考察してきた。その結果、「関節」「血脈」「気管」「血液」「血行」「触覚」「脊髓」「尾骶骨」などの語は、『医学原始』などの中国初期洋学書を通じて日本に移入された可能性が高いことがわかった。杉本つとむ氏が指摘された「蘭学者も多くは漢人の説を先に参照し、しかるのちに蘭書ののべるところも理解に達したというのが本筋ではないかと考えている」<sup>22</sup>という考えに賛意を示したい。

また、大槻玄沢が『重訂解体新書』の付録に「漢人先我及西洋之事者」「(物理小識、医学原始)是二百年前先我所發而得其実者也」と述べているところから、彼は方以智や王惠源らの著書から刺激を受け、漢人に遅れを取るまいという危機感を抱いて、蘭学書の翻訳に励むようになったのではないかと推察できる。

### 【参考文献】 (注に既出したものは省く)

1. 沈国威 (2010) 『近代中日词汇交流研究』. 中華書局, 2010年.
2. 沈国威 (2000) 「泰西人身说概”(1623) から“全体新论”(1851) まで—西洋医学用語の成立について」. 中国文学会紀要, 2000, (21):1-18.
3. 松本秀士 (2009) 「西医東漸をめぐる「筋」の概念と解剖学用語の変遷」『或問』, 2009年 (No. 17,) pp. 49-61
4. 鷲尾厚 『復刻 解体新書と小田野直武』, 無明舎出版, 2006年8月
5. 開国百年記念文化事業会編 『鎖国時代日本人の海外知識』 乾元社 (原書房 1978年復刻)
6. 鮎沢信太郎 (1948) 『鎖国時代の世界地理学』 (愛日書院刊、原書房復刻 1980年)
7. 洋学史研究会編 『大槻玄沢の研究』 思文閣出版, 1991年.
8. 酒井シズ, 『新装版 解体新書』 講談社学術文庫, 1998年.

後記: 本稿は20年前に書いた小論『近代日中語彙交渉史—新漢語を中心に—』(九州大学博士論文, 2001年、未刊)の一節を若干訂正して整理したものである。ここで、発表の場を提供して頂いた沈国威先生に深く感謝の意を申し上げます。

<sup>22</sup> 杉本つとむ (1998)、258-259頁。